

靈氣教化鈔（一名鬼畜）

七

南無久遠實成本師釈迦牟尼佛
南無靈山會上來集の分身諸佛
南無諸大菩薩五番善神諸天等殊には鬼子母大善神惣
じては佛眼所照の一切三寶來臨影嚮
妙法經力 速得自在 諸佛守護 增益壽命 心中所願
決定成就 善智識者 是大因縁 令得正見 不墮惡趣
須臾聞之 即得究竟云云
汝等業障に因て鬼畜野干卑賤醜陋の身を受け三毒毎

に熾盛んにして永く三惡を離るゝ能はず偶ま少分の
業通を感じて僅かに一分の自在を得ると雖も正念に
住する能はざるか故に佛道を障へては罪根彌々重く
善心を碍げては輪廻増々多し假令へ魔界の眷屬たら
んも遂に永く其の通力を恃のむこと能はざるべし轉
我邪心夫れ將た何れの時ぞや今ま一乘流布之國に來
て法華經に信順するものを惱すこと久し梵釋諸天が
佛前擁護之誓狀と殊には鬼子母神十羅刹女が頭破作
七分の誓狀とを恐れざるか、
抑も汝等の業障は元と無明從り生ず無明は暗くして

大意

靈氣教化鈔（一名、鬼畜）

南無久遠實成本師釈迦牟尼佛
南無靈山會上來集の分身諸佛
南無諸大菩薩、五番善神、諸天等、殊には鬼子母大善神、惣
じて佛眼所照 一切三寶來臨影嚮
妙法經力 速得自在 諸佛守護 增益壽命 心中所願 決定
成就 善智識者 是大因縁令得正見 不墮惡趣 須臾聞之
即得究竟云々。

汝たちは惡業の障りによって、鬼畜や野狐という卑賤で醜く

靈氣教化鈔（一名鬼畜）

南無久遠實成本師釈迦牟尼佛

南無靈山會上來集の分身諸佛

南無諸大菩薩五番善神諸天等殊には鬼子母大善神惣じては仏

眼所照の一切三寶來臨影嚮

妙法經力 速得自在 諸佛守護 增益壽命 心中所願 決定

成就 善智識者 是大因縁 令得正見 不墮惡趣 須臾聞之

即得究竟と云云

汝等業障に因て鬼畜野干卑賤醜陋の身を受け、三毒毎に熾盛

んにして、永く三惡を離るる能わず、偶ま少分の業通を感じ

て、僅かに一分の自在を得ると雖も、正念に住する能わざる

か故に、仏道を障えては、罪根彌々重く、善心を碍げては、

輪廻増々多し、仮令え魔界の眷屬たらんも、遂に永く其の通

力を恃のむこと能わざるべし、轉我邪心夫れ將た何れの時ぞ

賤しい身を受け、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒がいつも盛んであり、長い間三惡道の畜生・餓鬼・地獄を離れることが出来ない。偶然少しの業通を感じて、わずかな自由の境地を得たと言っても、正念の境地に住むことが出来ない為に、仏道を邪魔しては、罪の根がますます重くし、善の心を妨げては、輪廻がますます多くなる。たとえ魔界の従者であっても最後まで長くその神通力を頼りにすることは出来ない。自分の邪な心を転じることが出来るのは、いつになるであろうか。今、仏の唯一の教えである「法華經」が広まっている国に来て、「法華經」を信じ従う者を、長い間悩ませてきた。梵天・帝釈・諸天が仏の前で仏法擁護を誓った誓いと、特に鬼子母神・十羅刹女の「頭破作七分」の誓いとを恐れないのか。そもそも、汝たち悪い行いの業は、元来は仏の真理を知らないことから生じている。無明は暗く。

語註

業障……惡業の障り。

醜陋……顔かたちが卑しく醜いさま。

三毒……善根を毒する三種類の煩惱 貪欲・瞋恚・愚痴。

業通……過去の行為の結果が未来の善果に通じる。

正念……仏道を思い念じて忘れないこと。

障える……邪魔する。

無明……真理に暗いこと。一切の迷妄・煩惱の根源。

頭破作七分……「ずはさしちぶん」と読む。『法華經』の「陀羅尼品」で、鬼子母神や十羅刹女たちが、『法華經』の行社を守護する誓いを立て、行者を悩乱する者があれば、その頭を阿梨樹の枝のように頭は破れて七分と作らんと言った、その偈の一句による。

や、今ま一乘流布之國に来て法華經に信順するものを悩すこととし、梵釈諸天が、仏前擁護之誓状と、殊には鬼子母神、十羅刹女が、頭破作七分の誓状とを恐れざるか、抑も汝等の業障は、元と無明従り生ず、無明は暗くして

冥々たり法華經は生死の長夜を照す大光明なり明暗並らぶ可からず暗は光明を消すこと能はず無明の妄念曷くんぞ能く眞の行道を障へんや時は今末法たりと雖も日月未だ地に墮ち給はず行者は不肖なりと雖ども歸依正法の者たらば豈に祈禱の威力を現はさざらんや況や又三寶諸天善神照覽の砌りたるに於てをや一切業障海皆從妄想生と云云水大海に入て同一鹹味と成り風太虚に消えて寂然として聲無し因緣所生法我説即是空亦名爲假名亦是中道義と云云又曰見法を請求するに見者有ること無し若し見者無くんば誰か能

く見法を用んや外色を分別せば見不可見を見る可し見法無きが故に識觸受愛の四法皆な無きなり愛なきを以ての故に十二因縁の分亦無きなり是の故に眼に色を見る時即ち是れ涅槃の相なり餘も亦た例して爾なり等云云魔界佛界衆生界一如にして二如無く心佛及び衆生是の三も亦た全く無差別なり三にして而も不異なり不異にして而かも又三なり一道清淨なれば障礙なく又た自他無し虚空を擬たぐるること能はず實相を提けて何ぞ實相を諍ふことを爲さんや是の如くんば即ち趣々唯だ名のみあり神佛も亦

大意

はつきりしない。「法華經」は生死の長い夜を照らす大きな燈明である。明と暗は並ぶことが出来ない。暗闇は光明を消すことが出来ない。無明の妄念がどうして眞実の行の道を妨げることが出来るうか、出来る筈がない。時代は今、末法の時代であると言っても、日月はまだ地に落ちていない。行者は愚かで未熟であると言っても、正しい仏の教えに帰依する者である、どうして祈禱の威力を現さないであろうか。まして、また、三宝・諸天・善神が御覧になっている時には尚更、威力を現さないはずはない。經に、「一切業障海 皆從妄想生 云々」とある。

冥々たり、法華經は生死の長夜を照す大光明なり、明暗並らぶ可からず、暗は光明を消すこと能わず、無明の妄念曷くんぞ能く眞の行道を障えんや、時は今末法たりと雖も、日月未だ地に墮ち給わず、行者は不肖なりと雖ども、歸依正法の者ならば、豈に祈禱の威力を現わさざらんや、況や又三寶諸天善神照覽の砌りたるに於てをや、一切業障海、皆從妄想生と云云水大海に入て、同一鹹味と成り、風太虚に消えて、寂然として声無し、因緣所生法我説即是空、亦名爲假名、亦是中道義と云云又曰見法を諦求するに、見者有ること無し、若し見者無くんば誰か能く見法を用んや、外色を分別せば、見不可見を見る可し見法無きが故に、識觸受愛の四法皆な無きなり、愛なきを以ての故に、十二因縁の分亦無きなり、是の故に、眼に色を見る時、即ち是れ涅槃の相なり、余もまた例して爾なり、等云云魔界、仏界、衆生界、一如にして二如無く、

水は大海に入つて同一の塩味となり、風は大空に消えて、ひっそりとして音が無い。經に、「因縁所生法 我說即是空 亦名為假名 亦是中道義 云々」と。また言つ、見法詳しく求めると見ることが出来る者はいない。もし見ることが出来る者がなければ、誰が見法を使うことが出来るだろうか。外面に現れる現象を分別するならば、見えるものと見えないものを見分けることは出来る。見法が無いために、意識する、触れる、受ける、愛着するという四つの法は、みな存在しない。愛着が無いために、十二の因縁の区別もまた無い。このために、眼に現象を見る時、同時にこれは覺りの相である。他もまたこれと同じである、等云々。魔界、仏界、衆生界は一つのものであつて、別々のものではなく、心と仏と全ての生きものは、この三つもまた全く区別がない。三つであつてしかも異なるものではない。異なるものではなく、同時にまた三つである。一つの道が清浄であれば障害がなく、また、自他の区別もない。大空を上げて大空を遮ることは出来ない。実相を掲げて、どうして実相を争うことが出来るだろうか。このようであれば、つまりそれぞれの存在は、ただ名前だけがある。神仏もまた

語註

冥冥……事情がはつきりしないさま。はつきりせず、わかりにくいさま。
不肖……父や師に似ないで、愚かで未熟なこと。
鹹味……しおからい味。(「西」偏に「咸」は「鹹」が正しい)
太虚……大空、虚空。
寂然……ひっそりとしているさま。
諦求……詳しく求める。
十二因縁……衆生の苦の原因を順に十二段階を立てて説明したもの。
礙たげる……妨げる。さえぎる。ふせぐ。

心^{しん}仏^{ぶつ}及^{およ}び衆^{しゅ}生^{じやう}是^この三^{みつ}も、又^{また}た全^{ぜん}く無^む差^{しゃ}別^{べつ}なり、三^{みつ}にして、而^{しか}も不^ふ異^いなり、不^ふ異^いにして而^{しか}かも又^{また}三^{みつ}なり、一^{いち}道^{どう}清^{しやう}浄^{じやう}なれば障^{しやう}碍^{がい}なく、又^{また}た自^じ他^た無^なし、虚^こ空^{くう}を拏^あげて、虚^こ空^{くう}を礙^さたぐるこ
能^{あた}わ^ず、実^{じつ}相^{そう}を提^さげて何^{なん}ぞ実^{じつ}相^{そう}を争^あうことを為^なさんや、是^{かく}の
如^{ごと}くんば即^{すなわ}ち趣^{しゅ}々^{じゅ}唯^ただ名^なのみあり、神^{しん}仏^{ぶつ}も又^{また}

た復た然なり故に業障を解脱するの道は其本源に還つて生滅の法に達し入出自在にして實相を観ずるに在り何ぞ崇つて人を苦しむることを為さんや曷んぞ又反つて己を苦しむることを為さんや寧ろ還滅門の身と爲つて眞淨の法味を嘗め己れの威光勢力を増して護法善神の一分と爲る可きなり流轉三界所有の衆生は皆是れ久遠劫來世々の父母なり惡業を増長して泥梨之苦果を顧みざらんよりは速かに妄念の夢を覺まして早く本覺の正念に還るべし。

妙法蓮華經は十界皆成の教なれば鬼畜野干も亦た成
佛十邪見即正の教なれば魔王眷屬も亦た降伏して佛
法を護る可し行淺功深以顯經力惡魔魔民皆護佛法諸
餘怨敵皆悉摧滅
還念本誓 怨敵退散 一切無障礙
南無靈山一會 儼然未散 佛眼所照 一切三寶 諸
天善神 自他法界 平等利益

大意

同様である。だから、業の障りを解脱する道は、その本源に還つて、生きることと滅することの真理の教えに達して、自由にその境地を出入りして、現象の眞実の姿を観じることにある。どうして崇つて人間を苦しめるのか。また、逆に自分を苦しめることをするのか。むしろ滅門に還る身となつて、眞実に清らかな仏の教えの味を嘗め、自分の威光威力を増し、護法の善神の一つとならなければならない。流轉する三界に生きる全てのものは、皆永遠の時間にある世世の父母である。悪い行為を増して地獄の苦しみの果実を顧みないよりは即刻妄念の夢を覺ま

た復た然なり、故に業障を解脱するの道は、其本源に還つて、生滅の法に達し、入出自在にして、實相を観ずるに在り、何ぞ崇つて人を苦しむることを為さんや、曷んぞ又反つて、己を苦しむることを為さんや、寧ろ還滅門の身と爲つて、眞淨の法味を嘗め、己れの威光勢力を増して、護法善神の一分と爲る可きなり、流轉三界所有の衆生は、皆是れ、久遠劫來世々の父母なり、惡業を増長して泥梨之苦果を顧みざらんよりは、速かに妄念の夢を覺まして、早く本覺の正念に還るべし。

妙法蓮華經は十界皆成の教なれば鬼畜野干も又た成仏す、邪見即正の教なれば魔王眷屬も又た降伏して佛法を護る可し、行淺功深以顯經力惡魔魔民皆護佛法、諸余怨敵。皆悉摧滅
還念本誓 怨敵退散 一切無障礙
南無靈山一會 儼然未散 佛眼所照 一切三寶 諸天善神

して早く本来持つている覺りの智慧による仏道の思いに還らなければならぬ。

すばらしい教えである「妙法蓮華經」は、十界の全てが皆成仏できるという教えであるので、鬼畜や野狐もまた成仏する。邪な見知も又正であるという教えであるので、魔王やその従者もまた、降伏して仏法を守らなければならない。

行浅功深　以顯經力　惡魔魔民　皆護佛法　諸余怨敵　皆悉催滅

還念本誓　怨敵退散　一切無障礙

南無靈山一会　儼然未散　佛眼所照　一切三宝　諸天善神

自他法界　平等利益

語註

泥梨……地獄。

自他法界

平等利益

疫神教化鈔

ス

南無久遠實成本師釈迦牟尼佛
南無靈山會上來集之身分諸佛
南無諸大菩薩梵釋日月四天王等五番善神殊には鬼子母
大善神惣じては佛眼所照の一切三寶來臨影嚮
妙法經力 速得自在 諸佛守護 增益壽命 心中所願
決定成就
夫れ此の妙法蓮華經は常住佛性を以て咽喉と爲し、一
乘の妙行を以て眼目と爲し再生敗種を以て心腑と爲

し顯本遠壽を以て其の命と爲す唯一乘法無二亦無
三等云故に梵天帝釋日月諸天殊には鬼子母神十羅
刹女等此經を恭敬し受持の者を擁護すること猶ほ己
の眼を惜むが如し
凡そ權化の諸天魔梵其本地は法華經の一實相なれど
も垂迹の門は無量なり若し本に從て説かば亦た是の
如し昔刹等の惡の中に於て能く出離する是の故に亦刹
を以て化他の法門と爲す是れ即ち化他門に出でた
まふ時我が得道の門を示せしなり今形疫流行神の本
地を案ずるに蓋し亦た法性亦名の如來なるべき乎大
意

大意

疫神教化鈔

南無久遠實成本師釈迦牟尼佛
南無靈山會上來集之身分諸佛
南無諸大菩薩梵釋日月四天王等五番善神 殊には鬼子母大善
神惣じては佛眼所照 一切三寶來臨影嚮
妙法經力 速得自在 諸佛守護 增益壽命 心中所願 決定
成就

このすばらしい教えである「妙法蓮華協」は、永遠に存在す
る仏性を咽喉とし、唯一の教えの妙法を眼目とし、腐った種を

疫神教化鈔

南無久遠實成本師釈迦牟尼佛
南無靈山會上來集之身分諸佛
南無諸大菩薩梵釋日月四天王等五番善神殊には鬼子母大善神惣
じては佛眼所照の一切三寶來臨影嚮

妙法經力 速得自在 諸佛守護 增益壽命 心中所願 決定
成就

夫れ此の妙法蓮華經は、常住仏性を以て、咽喉と爲し、一乘
の妙行を以て、眼目と爲し、再生敗種を以て、心腑と爲し、
顯本遠壽を以て、其の命と爲す、唯一乘法、無二亦無三等、
云云故に、梵天帝釋日月諸天、殊には鬼子母神十羅刹女等、
此經を恭敬し、受持の者を擁護すること、猶お己の眼を惜む
が如し。

凡そ權化の諸天、魔梵、其本地は、法華經の一實相なれども、

生き返らせることを心臓とし、「顕本還寿」をその命とする。經に「唯有一乘法 無二亦無三等云々」と。だから、梵天、帝釈、日光、月光、諸天、特に鬼子母神、十羅刹女など、この經を憤み敬い、受持の者を擁護することは、自分の眼を惜しむのと同じである。

大体、權化の諸天、魔王、梵天は、その本地は、「法華經」の一つの眞実の姿であるけれども、垂迹の門は無量である。もし本地に従って説くならば、又このようである。昔、刹等の惡の中に分離の覺りの境地に達することが出来た。此の為にまた、刹を化他の教えの仏の教えの門とする。これがつまり、他者を教化する門に出た時、自分の仏道を得る門を示したのである。今、形疫流行神の本地を考えると、眞実の本性は又の名を持つ如来ではないだろうか。

語註

常住……生滅・変化なく永遠に存在すること。

敗種……声聞・緣覺の二乗が成仏できないのを、腐った草木の根や種子に例えている語

權化……神仏が衆生救済のために仮に姿を現した垂迹身に対して、その本源である仏・菩薩を言う

分離……煩惱を去って覺りの境地に入ること。

蓋し……ひょっとしたら、もしや。

垂迹の門は、無量なり、若し本に従て説かば、亦た是の如し、昔刹等の惡の中に於て能く分離す、是の故に亦刹を以て化他の法門と為すと、是れ即ち化他門に出でたまう時、我が得道の門を示せしなり。今形疫流行神の本地を案ずるに、蓋し又た法性亦名の如来なるべき乎、大

慈悲の内証自り、末法澆季の衆生が、惡業煩惱の深重なることを齊れみ暫らく化益の爲めに疫神と現じ、因縁業果の理りを示し給ふか、或説己身或説他身等云云、觀音經は三十三身を現じ妙音又三十四身を現すなり、疫神と現じ給ふとも、何ぞ本より實の邪神ならん耶、即ち是れ形を十界に垂れて種々の像を作すの類なる者歟、既に是の病者過去の罪障深重なりと雖も、妙法流布の時、生れて本化地涌之流を汲み、堅固の信地に安住して最勝の經王を憑み奉り加之ず本化の行者、其時に除病延命の祈禱を求めたり、乃是の道場に於て三寶諸天

等を勸請し、其の加被力を蒙つて之を申すなり、若し疫神は須らく病者の邪熱を醒まし本復せしむべし、尙ほ外に障礙有らば亦た與ふに之を除て速かに退散すべし、若し夫れ慈悲の爲めに病者を惱ますとならば已に最勝の妙法蓮華經を憑み奉り然らば即ち本縁に従ひ反つて是の病者を守護する可き者なり、斯く理りを盡して申すだにも尙ほ用ひ給はず、更に三寶諸天に言上して消滅を申し請ふ可きか、佛此の世界と他方の世界との梵釋日月四天龍神等を集め告げて曰く、我が正像末の持戒破戒無戒等の弟子等を第六天の魔王惡鬼

大意

大きな慈悲の内心の覺によつて末法で輕薄な時代の衆生が悪い行為と煩惱の深く重大なことを憐れみ、しばらく仮の利益のために疫神としてこの世に姿を現し、因縁による行為の報いを受けるといふ道理を示されたのか、經に「或説己身、或説他身等云々」と觀音菩薩はやはり三十三身の変化の身を現し、妙音菩薩はまた三十四の変化身を現す。今、疫神として現れなすつても、どうして本来は本當の邪神であるうか。つまり、これは姿形を全ての世界に置いて、様々な形象を現す類の者だらうか。すでにこの病人は過去の罪障が深く重いと云つても、すぐれた

慈悲の内証自り、末法澆季の衆生が、惡業煩惱の深重なることを、憐れみ、暫らく化益の爲めに、疫神と現じ、因縁の業果の理りを示し給うか、或説己身、或説他身、等云云、觀音猶お三十三身を現じ、妙音又三十四身を現す、今、疫神と現じ給うとも、何ぞ本より、實の邪神ならん耶、即ち是れ形を十界に垂れて、種々の像を作すの類なる者歟、既に是の病者、過去の罪障深重なりと雖も、妙法流布の時に生れて、本化地涌之流を汲み、堅固の信地に安住して最勝の經王を憑み奉り、加之ず、本化の行者某甲に除病延命の祈禱を求めたり、乃是の道場に於て、三寶諸天等を勸請し、其の加被力を蒙つて之を申すなり、若し疫神は須らく病者の邪熱を醒まし、本復せしむべし、尙お外に障礙有らば、又た与ふに、之を除て、速かに退散すべし、若し夫れ慈悲の爲めに病者を悩ますとならば、すでに最勝の妙法蓮華經を憑み奉り、然らば即ち、本縁に従

仏の教えが広まる時代に生まれて本化上行菩薩の流れを汲み、堅固な信心の境地に安住して、最も優れた経の王である法華經を頼み申し上げ、それだけではなく本化の行者、某甲に病を除き命を延ばす祈禱を求めた。したがって、この道場で、三宝諸天などを勧請し、その力の加護を蒙って、これを申すのである。よって、疫神は直ぐに病人の熱を冷まし、本復させなければならぬ。尚、他に触りがあるならば、また共に、この障りをも除いて、直ぐに退散しなければならぬ。もし慈悲のために病人を悩ませるのならば、すでに最も優れた妙法蓮華經を頼み申し上げている。それなら、つまり、本来の縁にしたがって、返ってこの病人を守護しなければならない。このように道理を尽くして言っても、用いないのであれば更に三宝諸天に申し上げて罰を与えることを要請し申し上げるべきか。仏はこの世界ともう一つの世界との梵天、帝釈、日天、月天、四天王、竜神などを集め告げて、「仏の正法、像法、末法の時代に戒律を受持する弟子、破戒した弟子、戒を持たない弟子などを、第六天の魔王、悪鬼神などが、

語註

内証……自らの心のうちで真理を覚ること。内心の覺り。
澆季……「澆」は輕薄、「季」は末の意味。道德が衰え人情が浮薄となった時代。末世。季世。
妙音……妙音菩薩のこと。東方の一切淨光莊嚴國から靈鷲山に來た菩薩。三十四の變化身によつて衆生を教化する。
治罰……取り調べて罰を与える。
正像末……「しょうぞうまつ」と読む。釈尊の教えが衰えていく時代の移り変わりを正法・像法・末法の三つの時代にとらえたもので、その略称。正法は、教えと修行が行われて悟りが得られる時代。像法は、教えや修行が行われても、悟りが得られない時代。末法、教えはあつても修行が為されず、悟りも得られない時代。

い反つて是の病者（びやうじゃ）を守護（しゆご）有る可き（べ）者（もの）なり、斯（か）く理（ことわり）を尽（つく）して申（もう）すだにも尚（な）お用（もち）い給（たま）はずば、更（さら）に三宝諸天（さんぼうしよてん）に言上（ごんじやう）して、治（ち）罰（ばつ）を申（もう）し請（こ）う可（べ）きか、仏化（ぶつけ）の世界（せかい）と他方（たほう）の世界（せかい）との、梵積（ぼんしやく）、日月四天（にちがつしてん）、龍神等（りゆうじんとう）を集め告（つ）げて曰（いは）く、我が正像末（しょうぞうまつ）の、持戒（じかい）、破戒（はいかい）、無戒等（むかいとう）の弟子等（でしとう）を第六天（だいろくてん）の魔王（まおう）、悪鬼（あくき）

神等が人王人民等の身に入て悩乱せんことを見ながら聞きながら治罰せずして須臾も過すならば必ず梵釋等の使をして四天王に仰せ付けて治罰を加ふべし若し氏神治罰を加へずんば梵釋四天王等も守護神に治罰を加ふべし梵釋も亦た是の如し他方世界の梵釋日月四天王等は必ず此の世界の梵釋日月四天王等を治罰すべし若し然らずんば三世の諸佛の出世にも漏れ永く梵釋等の位を失つて無間大城に沈むべしと釋迦多寶十方の諸佛の御前にして起請を書き置かれたり無戒等の弟子を擁護するすら尚ほ以て此の如し何かに況

や若暫持者は名持戒の病者に於て豈に守護の利生無らん乎。

法華經の行者信心に退轉無く、身に詐親無く、一切法華經に其身を任せて金言の如く修行せば儘かに後生は申すに及ばず今生には息災延命にして勝妙の大果報を成就すべし法華經の祈は漏れる水より火を出し乾ける土より水を儲くるが如く利生ある可きなり言上を痛しと思さば速かに是の病者の苦患を除き給へ、轉我邪心令得安住於佛法中得見世尊

南無聲聞一會 儼然未散 佛眼所照 一切三寶 自他法界 平等利益

大意

人間の王や人民などの身に入つて、悩まし乱そうとすることを
見ながら聞きながら罰を与えずに少しの間でも過すならば必
ず梵天、帝釈天などの使い、四天王に命じさせて調べて罰を与
える。もし氏神が罰を与えなければ、梵天、帝釈天、四天王な
ども、守護神に罰を与える。梵天、帝釈天もまた同様である。
もう一つの世界の梵天、帝釈天、日天、月天、四天王などは、
必ずこの世界の梵天、帝釈天、日天、月天、四天王などに罰を
加えなければならない。もしそうでなければ、無間地獄の大城
に沈むと、釈迦如来、多宝如来、十方の諸仏の御前で起請を書

神等が人王、人民等の身に入て悩乱せんことを、見ながら、
聞きながら治罰せずして、須臾も過すならば、必ず梵釋等の
使をして、四天王に仰せ付けて、治罰を加うべし若し氏神治
罰を加えずんば、梵釋四天王等も守護神に治罰を加うべし、梵
釈も又た、是の如し他方世界の梵釋日月四天王等は必ず此の世
界の梵釋日月四天王等を治罰すべし、若し然らずんば三世の諸
仏の出世にも漏れ、永く梵釋等の位を失つて、無間大城に沈
むべしと、釈迦他方十方の諸仏の御前にして、起請を書き置
かれたり、無戒等の弟子を擁護するすら、尚ほ以て、此の如
し、何かに況や、若暫持者、是名持戒の、病者に於いて豈に
守護の利生無らん乎、
法華經の行者信心に退轉無く、身に詐親無く、一切法華經に、
其身を任せて、金言の如く、修行せば、慥かに後生は申すに
及ばず、今生には息災延命にして、勝妙の大果報を成就すべ